2024 年 8 月 26 日

東亜大学大学院　総合学術研究科
研究科長　金田　晉　殿

人間科学専攻　論文審査委員会
主査　家根橋　伸子

**博士論文（甲）審査報告書**

博士論文（甲）の審査を実施いたしましたので、下記のとおりご報告申し上げます。

記

１．論文提出者　　安　蓉
２．論文題目
学習者の運用に繋げるための類義性を持つ実質語の使い分けに関する研究
―中国語母語話者における「準備」「用意」「支度」の使い分けを例に―

３．論文審査委員会　　主査　東亜大学大学院　客員教授　家根橋　伸子
副査　広島大学大学院　　教授　永田　良太
副査　東亜大学大学院　　准教授　帖佐　幸樹

**<論文内容の要旨>**

本学位審査請求論文は，日本語教育現場への貢献を前提とした類義性を持つ実質語の使い分けについて分析・提案を行った論文である。本論はそのケーススタディとして「準備」「用意」「支度」という３つの語が選ばれている。しかし，その方法論は先の３つの語に留まらず，他の類義性を持つ語にも援用できる可能性を持つ。

論文の構成は，以下の７章構成である。

まず，第１章では，日本語学的研究の現状が述べられ，研究成果の社会的意義を顧みることなく日本語研究が進んでいることが批判される。その現状を打開する一つの方法として，日本語教育現場への還元を前提とした日本語研究を挙げ，本論文はそこに位置づけられるものであることを述べる。その後，本論文が対象とする，類義性を持つ実質語の研究に関する現状が述べられる。具体的には，近年，実質語に関する研究が求められるようになってきている。しかしその反面，その蓄積は乏しいという現状がある。そのため，類義性を持つ実

質語研究の方法論の確立を含め，実質語研究の必要性を述べる。その上で，本論文が対象とする「準備」「用意」「支度」の３つの語を選択した動機が述べられる。

次に，第２章では，日本語学習者が「準備」「用意」「支度」を使い分けられるためには，どのような視点が必要であるのかという観点から，上記の３つの語に関する先行研究史が組み上げられている。この先行研究史は大きく二つの観点に分かれている。具体的には，一つは日本語学習者の母語の知識を考慮しない場合であり，もう一つは学習者の母語の知識を考慮する場合である。特に，後者に関しては，論文の副題にあるように中国語話者を念頭に置いた上で，先行研究がまとめられている。その上で，本章では以下の３つの課題を導出する。

① 「準備」「用意」「支度」の３つの語について用法毎に分析を行う必要がある

② 先行研究で提案されている使い分け規則はいずれも著者の主観的分析に基づくものが多く，運用実態に沿った提案が必要である

③ 日本語教育現場に還元するための具体的な提案が必要である

その上で，上記の３つの課題を解決するために，以下の 8 つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1：名詞用法において，「準備」「用意」「支度」は「ノ格」にどのような名詞を取るかを分析することで，その意味的特徴を明らかにする。

RQ2：漢語サ変動詞用法において，「準備」「用意」「支度」は「ヲ格」にどのような名詞を取るかを分析することで，その意味的特徴を明らかにする。

RQ3：「準備」「用意」「支度」において，特定の話題に出現する傾向はあるのか，『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』における研究対象の話題的特徴を明らかにする。

RQ4：中国語【准备】の名詞用法において，「名詞＋的＋准备」のパターンにおける名詞を分析することで，
その意味的特徴をまとめる。

RQ5：中国語【准备】の動詞用法において，「准备＋名詞」のパターンにおける名詞を分析することで，その
意味的特徴をまとめる。

RQ6：日本語の「準備」「用意」と中国語の【准备】との対応関係を明らかにする。

RQ7：「準備」「用意」「支度」の使い分けについて，母語を考慮しない日本語学習者への教え方を提案する。

RQ8：「準備」「用意」「支度」の使い分けについて，中国語話者向けの教え方を提案する。

第 3 章では，本研究において使用される言語コーパス及び，検索ツールについて述べられる。本研究では，日本語のコーパスにおいては，J-TOCC，TWC，BCCWJ の３つのコーパスが用いられる。また，これら３つのコーパスを併用した理由について，それぞれのコーパスの特性，及びメリット，そして，限界にも触れる形で説明が与えられる。次に，中国語のコーパスについては BCC コーパスを用いること，及び，その理由が紹介される。さらに，

この後に続く各章の下準備として,「準備」「用意」「支度」の 3 つの語の用法別使用傾向が報告されている。

第 4 章は RQ 1 から RQ 3 までに回答した章である。具体的には, J-TOCC, TWC, BCCWJ の 3 つのコーパスを用いて,「準備」「用意」「支度」の 3 つの語について分析を行い，以下の結論を導いている。

○RQ1 に関する回答

・名詞用法においては，基本的に「準備」が使用される。

・「準備」は「ノ格」にデキゴト名詞を取る傾向があるのに対して,「用意」はモノ名詞を取る傾向がある。

・「支度」は「ノ格」に「移動」に関わるデキゴト名詞を取る傾向がある，また，使用範囲が限られており基本的に「準備」で置き換え可能である。

・名詞用法においては,「食」に関わる名詞が「準備」「用意」「支度」のいずれとも共起している。

・書き言葉としての「準備」は各レジスターに跨っており，特に「教科書」に突出して出現している。一方,「用意」は書籍と雑誌に多く出現しており,「支度」は詩に比較的に馴染みやすい。

○RQ2 に関する回答

・漢語サ変動詞用法においては，基本的に「用意する」が使用される。

・「準備する」「用意する」「支度する」の 3 語はいずれも「ヲ格」にモノ名詞を取る傾向がある。

・「準備する」と「支度する」は使用範囲が限られており，基本的に「用意する」で置き換え可能である。

・ 書き言葉としての「用意する」は「法律」を除いた各レジスターに跨っており，特に「出版・雑誌」に突出している。一方,「準備する」は各レジスターにおいて，比較的に「ブログ」「広報誌」「教科書」のレジスターに馴染みやすい。

○RQ 3 に関する回答

・「準備」は「アルバイト」の話題においてよく用いられる。

・「用意」は比較的広い話題で用いられる。

第 5 章は RQ 4 から RQ 6 までに回答した章である。具体的には中国語の【准备】について，BBC コーパスを用いて分析を行い，以下の結論を導いている。

○RQ 4 への回答

・名詞用法においては，中国語の【准备】はデキゴト名詞と共起する傾向があることが特徴的である。

○RQ 5 への回答

・動詞用法において,【准备】はモノ名詞と共起する傾向があるのが特徴的である。

・【准备】は「食」に関わる名詞との共起が比較的動詞用法において出現している。

○RQ 6 への回答

・名詞用法の「準備」は名詞用法の【准备】と対応している。

・名詞用法の「用意」は名詞用法の【准备】と非対応関係にあるが，動詞用法の【准备】と対応している。

・漢語サ変動詞用法の「用意する」は動詞用法の【准备】と対応している。

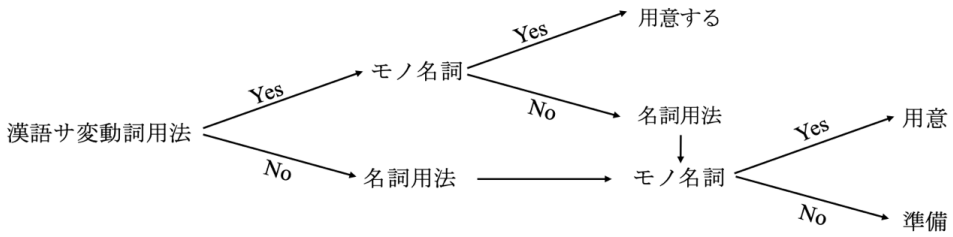
・「食」に関わる名詞と共起する場合，名詞用法の「準備」「用意」は動詞用法の【准备】と対応している。

第 6 章は，RQ 7 と RQ 8 への回答を行った章である。具体的には，RQ 1 から RQ 6 までの結果を踏まえて，「何を教えるのか」という観点から「有標・無標」の指標を導入する。そして，日本語教育現場への具体的な還元方法を提案し，以下の提案を行っている。

○ＲＱ 6 への回答

・漢語サ変動詞用法においては，モノ名詞と共起する場合（有標の場合）は「用意する」，それ以外（無標の場合）は名詞用法を使用する。

・名詞用法においては，モノ名詞と共起する場合（有標の場合）は「用意」，それ以外（無標の場合）は「準備」を使用する。




○ＲＱ 7 への回答

・無標

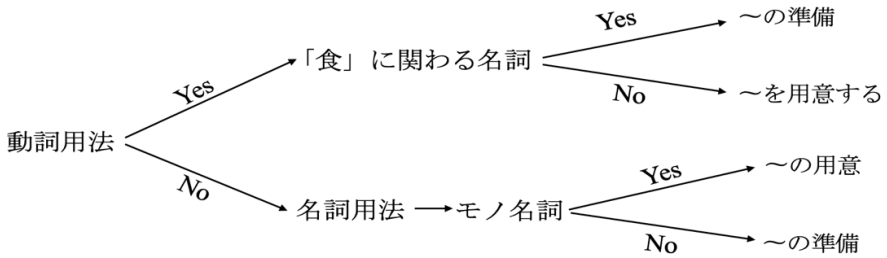
動詞用法においては，【准备】の考え方で「～を用意する」を使ってよい。

名詞用法においては，【准备】の考え方で「～の準備」を使ってよい。

・有標

動詞用法においては，食に関わる名詞と共起する場合，名詞用法の「～の準備」を使用する。

名詞用法においては，モノ名詞の場合，「～の用意」を使用する。



最終第 7 章では，本論文の意義，及び，今後の展望が述べられる。本論文の意義としては，以下の 4 点が挙げられている。

① 「準備」「用意」「支度」の使い分け規則を構築した

② 類義性を持つ実質語の研究を進展させた

③ 母語を考慮した使い分け規則を構築した

④ 研究結果を日本語教育現場へと還元した

また，今後の展望では，学習者の母語を考慮した使い分け規則の構築を発展させる手段として，中国語以外の言語での検証や，今回構築した規則を実際の日本語教育現場において実践することなどが挙げられている。

学位請求論文は， 以上の全 7 章，及び，参考文献・資料 から構成されており，そのすべてが科学論文に相応しい記述となっている。

**＜論文審査の結果の要旨＞**

安蓉氏による学位審査請求論文に対する審査委員会を，審査員 3 名，及び，オブザーバーとして東亜大学大学院総合学術研究科人間科学専攻主任・瀧田修一教授にご出席いただき，令和 6 年 8 月 18 日に，10 時 30 分から 12 時まで，東亜大学にて開催した。

冒頭約 30 分で論文要旨の説明を安蓉氏が行い，その後に論文内容についての質疑応答を約 45 分間行った。審査委員から複数の質問がなされ，それらに対しての回答が安蓉氏からなされた。回答の中には，審査委員の質問に対するものとしてやや不十分な回答もあったものの，いずれも論文全体の評価に影響するものではなく，修正検討課題とされた。その後，安蓉氏を一時退席させた後，合否判定を審査委員間で行った結果，審査委員会として「合格」の判定を下した。

次に，同日 13：00 より開催された公聴会において発表が行われ，公聴会参加者から複数の質問がなされ，それらに対しての回答が安蓉氏からなされた。公聴会終了後，合否の議論を専攻教員間で行った結果，人間科学専攻の総意として「合格」の判定を下した。

主たる審査委員会の審査内容は以下の通りである。

1. 研究課題の設定が適切であり，収集したデータに基づき丁寧に考察が行われている。
2. 中国語を含め，4 種類のコーパスを段階的に使用することによって，「準備」「用意」「支度」という類義語の使用実態と対応する中国語である「准备」との対応関係を明らかにしている。
3. 各コーパスを分析・対照したことによって得られた結果を，「有標・無標」を指標とした簡易なチャートとして示すことで，日本語学習者に有益な論考としてまとまっている。
4. 類義性を持つ実質語の研究を進展させたことに加え，方法論的観点から見てもその他の類義性を持つ語の分析研究への援用可能性を示したと言える。

5. 日本語学習者の母語を考慮しない場合の使い分け規則の構築だけでなく，日本語学習者の母語を考慮した使い分け規則の構築も行っている点に本研究の独自性があり，高く評価される。

以上、審査委員の審査及び公聴会の結果から、本論文は博士（学術）の学位を授与するに値するものであると認める。

以上